

## 序論 西行歌から西行説話へ

西行研究は、大きく「西行和歌」研究と「西行説話」研究にその領域が分けられる。和歌研究では、西行家集の解題や注釈、成立について研究がなされ、歌の綿密な読解を通して西行の生涯の事跡や思想を追究し、彼の人間像を浮かび上がらせようとしている。一方、説話文学のジャンルでは、西行の生涯を描く『西行物語』と、西行を語り手とする仏教説話集『撰集抄』を中心に、唱導や芸能などの関わりを探ることによって、作品の位置づけを明らかにする目的で研究が進められている。

また、西行和歌と西行説話の両側面からの交流によって展開した領域があり、主に近世の民間伝承や昔話として伝わる「西行伝承」に関する研究である。こちらは、近年「西行伝承研究会」によって著しい進展を見せている。そして、これまでに和歌・説話・伝承という三つの領域で研究されてきた西行研究は、二〇〇九年度に発足する予定の『西行学会』において、「西行学」という総合的な西行研究の分野が立ち上げられ、新たな展開が期待されている。

このように、異なるジャンルに跨って膨大な量の研究論文が蓄積されてきた西行研究において、論者はとくに「西行説話」の生成と受容に関わる問題に関心を持っている。本研究は、主に『西行物語』と『撰集抄』とを考察の対象とするこゝとで、和歌によって認識される歴史人物としての西行と、説話によって語られる伝説的な西行像との間に、どのような伝承関係があるのか、という問題を追究しようとするものである。

一 「西行記」

十五日己丑。二品御參詣鶴岡宮。而老僧一人徘徊鳥居辺。恠之。以景季令問名字給之處。佐藤兵衛尉憲清法師也。今号西行<sup>云々</sup>。仍奉幣以後。心静遂謁見。可談和歌事之由被仰遣。西行令申承之由。廻宮寺奉法施。二品為召彼人早速還御。則招引營中及御芳談。此間。就歌道併弓馬事。條々有被尋仰事。西行申云。弓馬事者。在俗之当初。愁雖伝家風。保延三年八月遁世之時。秀郷朝臣以來九代嫡家相承兵法燒失。依為罪業因。其事曾以不殘留心底。皆忘却了。詠歌者。対花月動感之折節。僅作卅一字許也。全不知奥旨。然者。是彼無所欲報申<sup>云々</sup>。然而恩問不等閑之間。於弓馬事者。具以申之。即令俊兼記置其詞給。緯被專終夜<sup>云々</sup>。

〔『吾妻鏡』文治二年八月十五日条〕

鎌倉時代に成立した『吾妻鏡』に記された西行の言動である。『吾妻鏡』の信憑性については歴史学で様々に議論されるところだが、伝承研究の観点からみれば、この記述は、西行を知る第一級の史料となる。源頼朝は和歌の事を話し合いたいと言ひ、西行を招いた。頼朝が歌道のみならず弓馬の事をも尋ねたところ、西行は、自分は遁世時に兵法の書を焼き捨てた身であり、和歌も奥義までは知らず、ただ興に従ひ詠歌をする程度だと答えた。しかし、懇ろに尋ねられて、西行はようやく弓馬の事を語り始めた。西行が語った弓馬の儀は、五十年後の嘉禎三年（一二三七年）の記事に詳細に書き記されている。弓の名手である海野左衛門尉幸氏が北条時頼に流鏑馬を指南する際に、西行の言葉を引用するのである。

挾箭之時。弓ヲ一文字ニ令持給事。雖非無其説。於故右大將軍家御前。被疑弓箭談議之時。一文字ニ弓ヲ持ッ事。諸人一  
 同儀敷。然而佐藤兵衛尉憲清入道西行云。弓ヲバ拳ヨリ押立テ可引之様ニ可持也。流鏑馬。矢ヲ挾之時。一文字ニ持事ハ非礼  
 也者。倩案。此事殊勝也。

〔吾妻鏡〕嘉禎三年七月十九日条)

武家の歴史書である『吾妻鏡』が記したのは、西行の、武士・佐藤兵衛尉憲清（義清）としての一面である。しかし頼  
 朝が老僧の正体を西行と知って所望したのは「和歌の事を談ず」ることである。つまり、頼朝は西行を歌人として捉えて  
 おり、武道よりも歌道に関心があるだろうことは心得ていたのである。

『二見浦百首』の勸進をはじめ、俊成と定家に判詞を求めた『御裳濯河歌合』と『宮河歌合』の両歌集により、西行の  
 歌人としての地位は、彼の存命中に、すでに並々ならぬところまでに達していることが窺える。そして、自ら詠じた「願  
 はくは花の下にて春死なむその如月の望月の頃」の歌のとおりに往生を遂げたその時から、西行は、“伝説”となった。  
 最初にこの伝説の歌人を語ったのは、後鳥羽院の勅命により撰進された『新古今和歌集』である。

『新古今和歌集』が収める西行歌は九十四首に及び、所収歌人の中では最多である。これらの西行歌は撰者たちによっ  
 て分類され、各部立てに配されると同時に、その詠作事情を示す詞書が付されている。撰者たちがどのような材料を以て  
 西行歌を撰んだのかは明らかでないが、現存する西行家集や撰集には見られない歌が『新古今和歌集』には収められてい  
 る。恐らくは、西行家集以外の資料をも参考にしたのであろう。しかし、撰歌の際に撰者が書き記した詞書は、果たして  
 西行が意図した詠歌事情そのものであるうか。注目すべきは、『新古今和歌集』所収西行歌のうち、「題知らず」とされ、

詠歌背景が未詳の歌々が七十三首にも上ることである。しかし、それにもかかわらず、これらの西行歌をすべて網羅して西行の生涯を語る物語——『西行物語』が創出された。また、出家遁世者でもある西行を、仏道唱導を目的とする仏教説話の語り手とした作品——『撰集抄』も著されている。漂泊の歌人という西行像を作り出した『西行物語』および、作者を西行に仮託した『撰集抄』は、ともに十三世紀の中頃の成立と目されており、現在のわれわれが中世の西行像を知るためには重要な作品である。

『西行物語』は西行の出自から往生まで、彼の生涯を伝記風に描き出したものである。西行の真作歌に加え、巷間に流布している西行説話が取り入れられて、その人生が描き出される。ところが、『西行物語』が描く多くの虚構の上に成り立った西行像は、当時の人々にとっては、決して偽りの人生ではなかった。後深草院二条が著した『とはずがたり』には、「西行が修行の記といふ絵」を見て諸国遍歴の修行を決意したことが書き記されている。また、阿仏尼は鎌倉への途次に、『西行物語』に書かれた天竜川での挿話を想起したと、『十六夜日記』に記している。『西行物語』の描く西行という人物は、歴史上の歌人西行そのものとして認識されていたのである。

一方、あまたの発心遁世者の説話を集めた『撰集抄』は、作者を西行に擬して仏の教えを説いている。『撰集抄』が西行の自作ではないことが判明している現在では、説話の内容を考証すればするほど、『撰集抄』における語り手像は西行から離れていくようである。しかし、江戸時代の随筆『空華談叢』は、「撰集抄不審凡十五條」を挙げながら、「西行の撰集抄」と記し、西行の手になることをなお信じ続けている。その冒頭には「西行ノ撰集抄ハ。道心者ノ龜鑑ナリトテ。世上ノ人は敬重スル久シ」とあり、『撰集抄』を仏道修養の軌範書として位置付けているのである。そして、末尾に次のような内容

が書かれている。

大凡ノ西行ハ。院ノ北面ノ侍ナリシガ。俄カニ発心入道セシ故ニ。唯唐大和ノ事ヲ聞アツメタルバカリニテ。慥カニ本抛ヲ考ヘズ。筆ニ信セテ書散セル故ニ。若ルアリサマナルモノナルベシ。誠ニ惜キ事ナリ。又此書ハ讃州善通寺ノ草庵ニ僑居ノ時ノ作ナリ。爾ラハ片田舎ノ書ニ乏シキ所ノ事ナル故ニ。弥以テ紕繆多カルベキハツナリ。

〔空華談叢〕卷之三

著者は、『撰集抄』が参考書の乏しい場所で作られたために、典拠の考証が不十分であると指摘しながらも、西行を評価している。芭蕉の西行思慕からも窺われるように、『撰集抄』説話は自明のこととして、西行の語る言葉となって信頼され、読まれてきたのである。

いったい、『西行物語』と『撰集抄』は、なぜこれほどまで後世の人々を魅了するのか。両作品は、いずれも『西行記』と記された伝本を持つ(1)。「西行記」とは、西行の自記とも、西行の伝記の類とも解釈できる。『新古今和歌集』の代表歌人という高みに押し上げられた西行の、自記もしくは伝記が広く読まれることは、至極当然なことであろう。しかし、作品が纏う魅力は、決してその名声だけによるものではない。作品に描かれた西行という人物像こそは、小林保治氏の言うような、「二仏」格化された西行信仰」を形成する最も重要な条件である(2)。では、両作品によつて物語化・説話化された西行とは、どのような人物なのか。この問いに、これまでの西行研究は議論を重ね、たとえば理想的な宗教人としての「西行好み」の人間である、という答えを与えた(3)。ところが、これらの西行説話ないし物語を創作する際に用意されている

素材は、史料に残された僅かな記録と、西行歌およびその詞書のみなのである。

西行は出家してからも歌に執心して詠歌を続け、自ら家集を編み、勅撰集の撰者に撰歌資料をも提供した。現在確認されている西行歌は二千首余りあるが、百首歌の創作が流行した時代にしては、決して多作とは言えないだろう。『新古今和歌集』に入集した西行歌には、前述のとおり「題知らず」とされる歌が多いが、その一方で、西行家集からも分かるように、長文の詞書を持つという特徴もある。例えば、陸奥の旅の途次で藤原実方の墓に遭遇した際に詠じた歌や、大峯で花山院の庵室跡の前で詠じた歌、高野山の奥の院で西住に思いを馳せた時の詠歌などには、いずれも長文の詠作事情が書き記されている。実方塚と花山院庵室での詠歌は『西行物語』に、奥の院での詠歌は『撰集抄』に取材され、説話化されている。一方、詠作事情の記述が簡略でも、物語性の強いものであれば、物語や説話に利用されるものも多い。西行の江口遊女邂逅譚はその好例であろう。西行と遊女との贈答歌は、『西行物語』に取り込まれ、西行の西国遍歴の一エピソードとなった。その一方で、『撰集抄』においては遊女が出家する顛末へと展開され、後日談まで語られている。つまり、西行を主人公とする物語や説話の多くは、彼の歌と詞書を散文化することで、新に作り出されたものなのである。

本論文は、前述したような「西行歌から西行説話へ」という西行に纏わる物語や説話の形成方法に重点を置き、『西行物語』と『撰集抄』を中心に論じること、中世における西行説話の多様性を明らかにすることを目指す。なお、本論文で言う西行説話とは、『西行物語』『西行物語絵巻』に見られる西行をめぐる物語と、いわゆる説話集によって伝承される、西行に関わる逸話を指している。